しも　いで　たみ　よし

下出民義

真面目が肝要

－中部財界を影で支えた重鎮－

下出民義（1861 ～ 1952）
写真：学校法人東邦学園提供

■生い立ち

下出民義は、1861(文久元)年12月8日、和泉国(いずみのくに)南郡岸和田(現・大阪府岸和田市)に生まれた。1875(明治8)年、小学校の教員として勤めながら、関西法律学校(現・関西大学)に通い、その後、安治川(あじがわ)小学校の校長に昇進した。

■愛知石炭商会の創業

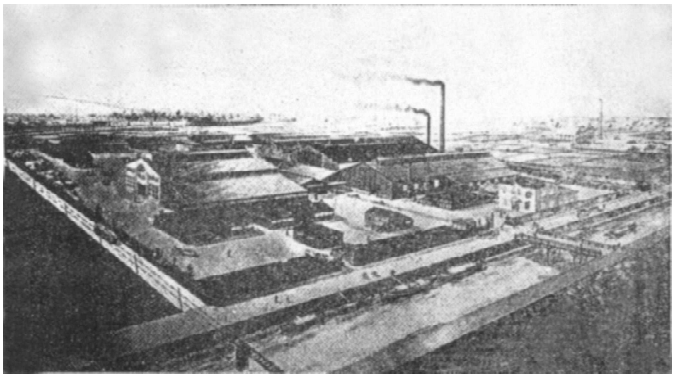
下出民義は、後に義兄となる西井直次郎と知遇を得て、大阪石炭会社に入社する。また西井の妹あいと結婚し、翌1890(明治23)年5月には長男義雄が生まれた。その前年1889年8月、下出は名古屋に進出し、愛知石炭商会を開業した。愛知石炭商会は工場の汽罐(ボイラ)用燃料の粉炭を取り扱い、名古屋紡績や尾張紡績などにその粉炭を納入し、売上げを伸ばした。

■福沢桃介との出会いと電気事業参加

愛知石炭商会は北海道炭鉱鉄道の石炭も扱うこととなり、同社幹事の福沢桃介と下出民義ははその縁で知り合った。

1889(明治22)年、名古屋電灯が電気事業者として開業した。この名古屋電灯が業績低迷に苦しんでいることを知った福沢は投資先として株式取得を目指すことにする。1909年2月、三井銀行名古屋支店長の矢田績と福沢は名古屋電灯への投資を決め、下出は株式買収を始める。福沢は筆頭株主となり、常務取締役に就任し、下出も1912(大正1)年12月、取締役に選出された。

以降、下出は福沢と連携して活動を行っていく。1914年12月、福沢が名古屋電灯社長に選出され、下出も常務取締役に昇格した。名古屋電灯、大同電力のほか白山水力取締役、矢作水力顧問、電気製鋼所社長、木曽電気製鉄副社長、愛知電気鉄道取締役、名古屋桟橋倉庫社長など福沢とともに木曽川の電源開発や周辺電気事業の合併、需要対策として名古屋地区の工業化を推進し、福沢関連事業の経営に手腕を発揮した。



下出民義が初代社長に就任した電気製鋼所の熱田工場
出典：『中京名鑑』名古屋毎日新聞、1936

■東邦商業学校の創設

下出民義は、実業界ばかりでなく教育界でも熱心に活動することになる。自ら設立者および校主となって学校の設立認可を受け、1923(大正12)年4月、名古屋市中区南新町(現・東区)に東邦商業学校(現・東邦学園、内に東邦高等学校、東邦中学校併設)を開校した。「真面目な実業人の育成」を教育理念に掲げ、初代校長には元名古屋市長の大喜多寅之助を招き、長男の下出義雄や豊田利三郎を同校理事に任じ、教員も多方面から集めた。下出民義も息子の義雄も、「永年いろいろな会社に関係してみて、まじめに実直に働く人材の養成が急務であると痛感した。学校の綱領として「真面目」を選んだのもそのためである」と語っている。

下出義雄（左）と校主下出民義（右）
写真：学校法人東邦学園提供

■政界進出　衆議院議員、貴族院議員として

下出民義は、1920(大正9)年5月衆議院議員に、1928(昭和3)年9月からは多額納税者として貴族院議員に任命された。最終的に1947(昭和22)年5月の貴族院廃止まで3期務めている。

1952(昭和27)年8月16日、名古屋市中区南大津町の自宅にて下出民義は92歳で死去した。

（朝井佐智子）